

日本におけるヒューマンビートボックスの概念形成

—世界的な潮流と日本人ビートボクサー“Afra”との関わりから—*

河本 洋一

【要 旨】 人間の音声を駆使した“ヒューマンビートボックス”という新たな音楽表現は日進月歩の発展をみせており、海外では愛好者のコミュニティや研究者らの間で、活発な議論が展開されている。一方、日本では技術面への関心は高いものの、概念形成に関する議論は不足しており、その拠り所となる日本語の資料が必要であった。

そこで本稿は、世界最大の愛好者コミュニティの様々な論考や世界初の解説書などが示す内容に、国内外の“ビートボクサー”と呼ばれる演奏者らへの聞き取り調査の結果を加え、ヒューマンビートボックスの歴史的背景や音楽表現としての様々な特徴や可能性を整理した。その結果、日本におけるヒューマンビートボックスの捉え方と世界的な流れにはずれがあったことや、ビートボクサー Afra (本名：藤岡章) が世界と日本との架け橋となり、日本におけるこの音楽表現の発展に大きく貢献したことなどが明らかとなった。

キーワード：ヒューマンビートボックス、歴史的背景、特徴、日本人ビートボクサー、Afra

1. ヒューマンビートボックスとは何か

1.1 音声による模倣行為の多様性

人の発話器官¹⁾ (発声器官と唇、歯、歯茎、口蓋、舌、咽頭などの総称) は多種多様な音声を発することが可能である。その音声を使って我々は会話したり歌ったりしている。声を使って何らかの音を模倣するという行為は枚挙に暇がない。例えばヒンズーの音楽では、ドラムを奏でようとする初心者は、全てのリズムを声で諳んじるまでの約2年間は、ドラムに触れることを許されない。そこで彼らは、使用するドラムの音を模倣した「Dha、Dhi/Dhin、Ti/Tin、Ra、Ki、Ta、Na、Tin」などのような、言語で使用する音声 (以下、“言語音”) を使って練習し、本番では、実際に演奏する前にリズムをこれらの言語音を使って唱えることがよくあるという²⁾。日本国内でも、伝統楽器の指導に「テンツクテンツクテンテンツクツク」などの言語音で模倣した口唱歌くちしょうがを用いることは、よく知られている。これらはみな、言語音を使った模倣の一種であると考えられる。

一方、本物の楽器や様々な装置などの音と音響的によく似た音 (以下、“直接的模倣音”) ³⁾ を使った模倣の例も世界各地にある。それは、“ボーカル・パーカッション”と呼ばれる、人間の音声を使って打楽器の音を極めて忠実に模倣する技術に類する音である。Dery (1988) は、これとよく似た音が、ピグミー族が行うハミングや唸り、声門刺激、ブッシュマンが出す吸着音などにあると述べている⁴⁾。また、“HUMANBEATBOX.COM”⁵⁾ というヒューマンビートボックスの世界最大のコミュニティサイトの論考『The Pre-History of Beatboxing』によれば、1880年代後半には、ア・カベラの黒人カルテットが、舌のカチカチいう音や鋭い息を吸い込む音を使用するようになったとされている。そして、ビーバップ (bebop) と呼ばれるジャズの一スタイルが登場した1930年代には、ジャズやブルースの歌手が、言語音としては聞き取れないような音声を使用するようになったとされている。このような音声は、直接的模倣音と同様の非言語音であると考えられる。

このように、音声を使って楽器などの様々な音を模倣す

* Conceptualization of Humanbeatbox in Japan: The global trend and relationship with a Japanese beatboxer "Afra"

by KAWAMOTO, Yoichi

専門分野：音楽表現、音楽教育、指揮

所 属：札幌国際大学短期大学部

連絡先：y-kawamoto@ts.siu.ac.jp

(2019年5月15日受付 2019年9月22日採録決定)

る行為は、言語音であるか直接的模倣音（非言語音）であるかを問わず、これまで多種多様に行われてきた。

1.2 ヒューマンビートボックスという新しい音楽表現

人間が発することのできるあらゆる音を素材として様々なスタイルの音楽を構築する音楽表現がある。このような音楽表現は、“ヒューマンビートボックス” (Humanbeatbox) と呼ばれ、これをおこなう人は、“ビートボクサー” (beatboxer) と呼ばれている。

ヒューマンビートボックスは、人間の発話器官を使い、一人または複数の人間で音楽を創り出す、新たな音楽表現の形態の一つであり、ニューヨークのストリートカルチャーを発祥としている⁶⁾。通常は言語音を発するために使用している発話器官を使い、現在では、少なくとも17カテゴリー・124種類もの音声を身体から発するとされている。(文末【資料】)

ヒューマンビートボックスは、“ビートボックス”という装置から発せられる音を人間の音声で模倣したことがきっかけである。Matela (2014) は次のように述べている。

ヒューマンビートボックスは1970年代半ばに発明されたものではない。文明の幕開けから、人間は音を使ってコミュニケーションをとり、危険や宗教的な意味を伝え合ってきた。音楽や歌のような音の芸術が登場するとすぐに、音を模倣する技術はいろいろな形をとっていった⁷⁾。

音を模倣する行為は、ヒューマンビートボックスにだけ確認される特徴ではない。そこで、素材として使用される音やスタイルなどについて、ヒューマンビートボックス独自の特徴を挙げておく。なお、ヒューマンビートボックスが誕生した歴史的経緯については、後ほど詳述する。

【特徴①】発話器官から発せられるあらゆる音を素材としている。

ビートボクサーが発する音声で、最も基本的な音はドラムセットの直接的模倣音である。その音は、母音性がほぼ感じられないため言語音には聞こえず、また、周波数分布（周波数スペクトラム）や音の減衰（エンベロープ）も本物の楽器音と酷似している場合が多い。(河本：2009、2018)⁸⁾ また、声楽や管楽では吸気で音声を発することはないが、ヒューマンビートボックスでは、吸気を使ってスネヤドラムなどの直接的模倣音を発する場合があり、このような音の出し方はインワード (inward) 奏法と呼ばれている。この奏法を使用すると、ビートボ

クサーは呼気と吸気の両方を使って音を発することができるため呼吸が苦しくならず、音が途切れない（休符が入らない）ように聞こえる演奏をすることも可能である⁹⁾。

ヒューマンビートボックスという音楽表現は、ビートボックスと呼ばれる装置の音を人間の音声で模倣したことが発祥¹⁰⁾ であるため、その特徴を理解する上で、模倣という行為は重要な要素である。（「3.」で詳述する。）ただし、ビートボクサーが発する音の全てが直接的模倣音というわけではなく、模倣対象をもたない音声も素材として使われている。

一般社団法人日本ヒューマンビートボックス協会の理事長を務めるビートボクサー TATSUYA¹¹⁾ (本名：和田辰也) (1985～) によれば、「ヒューマンビートボックスの世界大会では、既存の楽器音を口で忠実に再現しようとする流れがある一方で、人間でしか創り出せない音を使って演奏を構築させようとする動きも見られる」¹²⁾ という。このことは、ヒューマンビートボックスは、具体的な模倣対象をもつ直接的模倣音だけではなく、直接的な模倣対象をもたない人間由来のオリジナルな音も素材としていることを意味している。

【特徴②】様々なジャンルの音楽との融和が図られている。

これまで開催された世界大会¹³⁾ やインターネット動画¹⁴⁾ を参照すると、今日のヒューマンビートボックスは、ヒップホップの音楽を源流としながらも、様々なジャンルの音楽を取り入れながら演奏されていることがわかる。特に1990年以降は、後述するビートボクサー Kenny Muhammad を筆頭に、ヒップホップの音楽だけでなく、ジャズやロック、レゲエやサルサといったジャンルとの融和が図られており、多種多様な音楽を表現するための新たなスタイルとなりつつあることを示唆している¹⁵⁾。

【特徴③】聴くことと再現することの繰り返しが、音楽表現に能動的に関わる姿勢を生み出す。

ビートボクサーの Afra (本名：藤岡章) (1980～) や TATSUYA によれば、ヒューマンビートボックスは、発音技術や演奏のスタイルに関して厳格な決まり事が少ないため、むしろそのことが、自らが音楽表現に能動的に関わる姿勢を生み出しているという¹⁶⁾。これは、様々な音を自ら創り出す楽しさと、それを様々な音楽として構築していくという楽しさを併せ持っていることを意味している。また複雑なビートの全てを可視化できないということもあり¹⁷⁾、音を聴いて覚えることの繰り返

返しによって体験的に表現内容を記憶していくことが一般的である。定番の音の出し方に関しては、ビートボクサーの間で音を発する仕組みの共通認識ができている場合もあるが、ビートボクサー同士が互いに同じ音を発していると認識していても、音を発する仕組みが異なる場合もある。重要なのは耳で捉え、それを自らの口や鼻等を使って繰り返し再現するという能動的なプロセスであるという。

【特徴④】互いに学びあうコミュニティが形成されている。

HUMANBEATBOX.COM は『A New School of Beatboxers』という論考の中で、「インターネットのおかげで、世界中のビートボクサーたちが芸術作品について議論し、共有することができるようになった」¹⁸⁾と述べている。これは、インターネットを介して、ビートボクサー同士が結束力を強め、ヒューマンビートボックスに対する考え方や演奏技術の情報を共有し学び合う関係性を築いていることを意味している。日本においてもこの傾向は少なくない。特に日本では94.7%のビートボクサーがヒューマンビートボックスに関する情報をインターネットから得ている、と回答¹⁹⁾しており、ビートボクサーから直接情報を得ているとする51.6%と比較すると、インターネットのコミュニティ形成が、互いに学び合う関係性に大きく関与していることがわかる。

1.3 “ヒューマンビートボックス”という用語に関連する誤用や混同

ヒューマンビートボックスの概念を正しく理解するために、日本国内でこの用語と同義に使用されている和製英語や、混同して用いられている概念について整理しておく。

① 誤用：“ボイス・パーカッション”や“ヒューマンビートボクサー”という和製英語

日本では、後ほど詳述するあるテレビ番組がきっかけで、“ボイス・パーカッション”や“ヴォイス・パーカッション”という用語が広まり、しだいに“ボイパ”や“ヴォイパ”と略されて用いられるようになった。ボイパ（ヴォイパ）という用語は、ア・カペラ・グループの中で肉声による打楽器の模倣を受け持つパートという意味で用いられてきた。模倣の度合いは、“シュビドゥビ”や“ダバダバ”といった言語音を用いた“スキヤット”に近い表現から、実際の打楽器の音を忠実に再現した直接的模倣までがある。

ただし、日本国内で肉声による打楽器の直接的模倣という意味に用いられてきたボイス・パーカッションという用語は、和製英語である。世界的には、“ボーカル・パーカッ

ション” (Vocal Percussion) が適切な用語であり、打楽器の音を模倣する技術とそのパートを担う人という二つの意味で用いられている²⁰⁾。

また、ヒューマンビートボックスの奏者を意味する“ヒューマンビートボクサー” (Humanbeatboxer) という用語も、和製英語である。詳しくは、「3.」で後述するが、ビートボックス (beatbox) と呼ばれていた装置から発せられる音を、人間 (= human) が模倣するという意味でヒューマンビートボックスという言葉が生まれた。そして、その奏者は、ビートボックスが人間化したもの = Beatbox+er と表される。この用語にはすでに「人間が演奏する」という意味が含まれてため、敢えて“ヒューマン”という言葉で“ビートボクサー”という言葉の前に付ける必要はない。

② 混同：“ボーカル・パーカッション”と“ヒューマンビートボックス”は異なる概念

日本国内では、いわゆる“ボイパ”とヒューマンビートボックスが混同されることが少なくない。聞こえてくる音が打楽器などの直接的模倣音を多用している場合は、その傾向が特に強くなる。しかし、“ボイパ”を担当している奏者が単独で演奏を構築するという点ではなく、あくまでもア・カペラ・グループの一員としての役割の中で演奏をしているという点が、単独での演奏を可能とするヒューマンビートボックスとは異なる点である。つまり、“ボーカル・パーカッション”は、演奏の中で打楽器のような音を口で発する技術とそれを担う人という概念であるのに対し、ヒューマンビートボックスは、様々な音を発する技術に加え演奏のスタイルとしての意味をも含む概念であると言える。ただし、どちらも既存の楽器の音を模倣した言語音を使ったり、直接的模倣音を使ったりするため、日本国内ではテレビ番組を通じて“ボイパ”という用語が、ヒューマンビートボックスをも包括する用語として広まった。

一般の人たちがこれらの用語の違いについて認識する機会は少ない。しかし、ヒューマンビートボックスの概念を正しく理解するためには、いわゆる“ボイパ”は、[打楽器の音を模倣する技術とアンサンブルの中でそれを担う人] という意味である一方、“ヒューマンビートボックス”は、[多種多様な音を発する技術と単独を基本とする演奏スタイル] という意味になることを踏まえておく必要がある。

2. 研究の目的と方法

2.1 研究の目的

ヒューマンビートボックスは、発話器官を使った音楽表

現であるものの、これまで我々が認識してきた“声楽”の概念とは異なる特徴を有しており、その演奏技術は現在も急速に進歩し続けている。そして、前述のヒューマンビートボックス・コミュニティサイト“HUMANBEATBOX.COM”によれば、ヒューマンビートボックスは、ヒップホップ²¹⁾の文化の三大要素²²⁾である「ブレイクダンス」「グラフィティ」「ラップ・ミュージック」に続く要素として加えられるようになり、その概念形成や演奏技術の急速な進歩に関する議論が活発に行われるようになってきたとされている²³⁾。

一方、日本国内では、技術の習得やコミュニティの形成に関する関心は高いものの²⁴⁾、ヒューマンビートボックスが音楽の表現形式の一つとして認知されるような議論はあまり行われてこなかった²⁵⁾。したがって、日本において用いられているヒューマンビートボックスという用語は、関連する様々な概念との混同や、萌芽期に活躍した人物の軌跡が未整理であり、海外と比べると概念形成の面で遅れをとっていた。その理由は、一部の日本人ビートボクサーを除く多くの人々は、海外でのヒューマンビートボックスの概念形成に関する活発な議論や関連する領域との学際的研究、また優れた学位論文²⁶⁾といった、演奏以外の情報を知る機会が少なかったからではないかと推測される。

そこで筆者は、日本国内では未だ進んでいないヒューマンビートボックスの概念形成を促進させるために、海外のコミュニティでの論考や文献及びビートボクサーへの聞き取り調査等を基に、ヒューマンビートボックスとは何かについて論じることを研究の目的とした。

2.2 研究の方法

本稿は、筆者が2014年から2017年に取り組んだ『音楽表現の新たな素材としてのヒューマンビートボックスに関する基礎研究 日本学術振興会科学研究費基盤研究(C)課題番号26370193』の研究計画に沿って実施された事例収集や文献検索及び聞き取り調査や標本調査による研究成果の一部を基に構成されている。この研究は、ヒューマンビートボックスという新たな音楽表現の発祥や国内外での発展について明らかにすることを目的に、次のような計画で進められた。

【第1段階】国内外の演奏事例と文献の収集及びビートボクサーへの聞き取り調査による基礎概念の構築(本稿)

① 文献の収集

研究領域として未成熟なため、日本国内では、2009年以前の論文は皆無という状況である²⁷⁾。したがって、ヒューマンビートボックスについて直接言及した文献は、

海外最大級のコミュニティサイト“HUMANBEATBOX.COM”の論考や世界初の解説本である“Human Beatbox -Personal Instrument-” (日本版未刊行)²⁸⁾などに依拠することにした。

② 映像及び音源の資料収集

国内外の映像資料の収集に関しては、主に二つの方法をとった。一つは、ビートボクサーが演奏する様子を直接ビデオで記録する方法であり、もう一つはインターネットの動画サイトなどに投稿されている映像と音声を活用する方法である。前者の方法は、一般社団法人日本ヒューマンビートボックス協会の協力を得て、日本国内(2016年度)、英語圏ではない地域(2014年度)、アメリカとヨーロッパ圏(2015年度)三つのカテゴリーで事例を収集した。国内の事例としては、国内最大の大会であるJapan Beatbox Championshipや、この大会の歴代チャンピオンの一人であるビートボクサーTATSUYAや“すらぶるため”の独自映像を撮影した。また、インターネット動画投稿サイトから、ビートボクサーの“妖怪うらに洗い”、Kairi、Sh0h、Daichi、ZU-nA、HIKAKIN等々多数のビートボクサーの演奏事例を収集した。

一方、海外の事例としては、英語圏ではない地域として台湾を取り上げ、台湾ビートボックス協会会長のAmicや台湾大会5年連続チャンピオンのJimixの独自映像を撮影した。また、ベルリンで開催されたBeatbox Battle Championship 2015の公式サイト(BeatboxBattle TV)の映像や会場で独自撮影した映像も分析資料とした。また、海外のビートボクサーのドキュメンタリー映像として、『Breath Control』²⁹⁾という映画の映像を入手した。

また、音源資料については、文献の収集で得られた情報を基に、世界的に構築されている音楽データベース“Discogs”を使用して、レコードやCDの情報を特定した。

③ 聞き取り調査

ビートボクサーの多くは健在であり、様々な情報について直接聞き取ることが可能である。そこで、実際にビートボクサーと面会し、ヒューマンビートボックスを始めたきっかけや演奏技術の習得方法、この音楽表現の成り立ちに関する意見などを聴取した。対象としたのは、日本からは、Afra、TATSUYA、すらぶるため、ZU-nA、台湾からはJimix、Amicの合計6名を対象とした。特に、Afraに関しては、日本人初のビートボクサーとして、その生い立ちから国内でのデビューまでの個人史を詳細に調査した。

④ 基礎概念の構築

上記①～③で収集した資料と調査結果を基に、まずこの音楽表現が成立した歴史的背景を整理する。次に、音楽表現としての特徴を整理し、ヒューマンビートボックスという音楽表現の基礎概念を構築する。なお、日本ではヒューマンビートボックスより先に、これと混同される他の音楽表現が広まったため、ヒューマンビートボックスという用語は、しばしば誤用や混同がみられる。そこで、基礎概念を構築した後に、この誤用や混同を回避するための記述をおこなった。(前項、「1.2、1.3」) 次に、この音楽表現を発展させていった世界的なビートボックスたちを概観し、Afra との関わりを考察する。そして、世界の潮流をつくったビートボックスと Afra との関わりを整理し、日本におけるヒューマンビートボックスの概念形成を試みる。

【第2段階】音響分析と発音技術の解明（研究成果の一部を公表）

収集した演奏事例について、様々な発音技術の音響的特長を分析・整理した。その成果は論文などのかたちでは未発表であるが、分析したデータの一部は、NHK・Eテレ（教育テレビ）の番組『すイエんサー』³⁰へ提供し、ヒューマンビートボックスの音声と日常会話で使用する音声の違いなどを明らかにした。なお、発音技術の習得法については、前述したコミュニティサイト HUMANBEATBOX.COM のチュートリアルで詳細な解説がなされているため本研究では取り上げないが、ヒューマンビートボックスの素材となる音の分類法については検討の余地があるため、別の機会に論じる。

【第3段階】発音技術の共通化と技術の指導方法の簡易化（未了）

音楽表現として一般化するための技術の共通化と指導方法の簡易化を検討し、ヒューマンビートボックスが学校教育の現場などで広く取り上げることが可能かどうかを検討する。一部のビートボックスはすでにカルチャースクールのような形式でヒューマンビートボックスの指導を行うようになってきている。しかし、指導のための合理的な方法やその効果の検証については未だ解明されておらず、今後の研究成果³¹を待たなければならない。

3. ヒューマンビートボックス誕生の歴史

3.1 装置としてのビートボックス

世界初のヒューマンビートボックスの専門書『Human

Beatbox-Personal Instrument』の著者の Matela (2014) は以下のように定義している。

ヒューマンビートボックスは、音声器官のみを使用して、リズムのあるドラムサウンド、メロディーまたは模倣した楽器を創り出す芸術である。これは、単語の子音または母音だけでなく、非言語音を加えた最先端の歌唱法である³²。

この定義のポイントは、ヒューマンビートボックスとは、“新たな歌唱法”による模倣の芸術としている点である。つまり、既存のリズムパターンや楽器の音を、“新たな歌唱法”とされている方法で“代替”するという意味合いが強く現れている。なぜなら、ヒューマンビートボックスという呼称の成り立ちには、ある装置の名称が密接に関係しているからである。

今では、“ビートボックス”と言えば、“BEATBOX BATTLE WORLD CHAMPIONSHIP”のようにヒューマンビートボックスを指すこともある。しかし、元来“ビートボックス”という呼称は、Tyte と White (2005) によれば³³、1959年に Wurlitzer 社（米国）から発売された Sideman（写真1）³⁴という“リズムマシン”³⁵の装置名であったとされている。“リズムマシン”とは、発振器から電氣的に発せられる信号を加工し、プリセットされた様々なリズムパターンを自動で演奏するという装置である。現在ではデジタルサンプリングされた音源を使用し、装置の小型化、低価格化が進んでいるが、発売された当初はアナログ音源だったため、現在の装置のように、自由にリズムパターンや音色の組み合わせをプログラムすることはできなかった。それは、あくまでも決められたパターンのビートを刻む装置でしかなかった。そして、その装置があまりにも大がかりな箱状であったことから、「ビートを刻む箱（ボックス）＝ビートボックス」というスラングが発生³⁶したと言われている。その後、1979年に ELI 社（米国）から発売された CompuRhythm CR-7030（写真2）³⁷という型番のリズムマシンの操作盤に、初めてビートボックス（Beat Box）という名称が記された。このように、ビートボックスという呼称は、元来は装置の名称であった。

続いて1980年には、これまではプリセットされていたリズムパターンしか演奏できなかったビートボックスに、自由にパターンをプログラムできる機種が現れた。これが、Roland 社（米国）の Rhythm Composer TR-808 である。当時の本体価格は1,195 \$（US）となり、かなりの低価格化が



【写真1】 Sideman



【写真2】 CompuRhythm

進んだものの、若者にとっては、まだまだ高嶺の花であった。

このように、装置としてのビートボックスは、1959年に端を発し1970年代から80年代初頭にかけて急速に小型化、低価格化し、TR-808は日本でも「やおや」の愛称で呼ばれ普及が進んだ。そして、ヒップホップの音楽の中で、装置としてのビートボックスは重用されるようになっていった。

3.2 装置としてのビートボックスの音を模倣する新しい習慣の登場

ヒップホップとは、Afrika Bambaataa³⁸⁾ (本名: Kevin Donovan (1957~)) が、ニューヨークのブロンクス区で誕生した1970年代の文化に付けた呼称である³⁹⁾。この地区には、アフリカ系やカリブ系、ヒスパニック系のアメリカ人が住んでおり、貧困層が多いことで知られている。これらの人たちが、“ブロック・パーティ” (一つの街区単位で実施されるお祭り) と称して音楽を演奏したり踊りを踊ったりする中で、ラップ (MCing)、ブレイクダンス (B-boy)、グラフィティ (Graffiti) といったヒップホップ特有の三大要素を築いていったと考えられている⁴⁰⁾。そして、現在ではこれにDJ (DJing) を加えた四大要素がヒップホップ特有の要素であるとされている⁴¹⁾。

ヒップホップの三大要素のうち、ラップはリズムカルに言葉を音楽に乗せた表現である。ビートボクサーたちのコミュニティサイトのHUMANBEATBOX.COMの論考『The Pre-History of Beatboxing』によれば、その初期段階を形成したニューヨークの若者は、ビートを作ったりミキシングしたりするための装置であるビートボックスを購入するための十分なお金がない中で、MCやDJになることを夢見ていたという。そして、初期段階のリズムは、ペンキが入った缶や、ゴミ箱などを使用して作られたとされている。そして、前述のブロック・パーティやハウス・パーティ (家単位で行う集まり) や地元のセッションなどでリズムパートを作り出すために、人間の声を使い始めた。これは、前

述のCR-7030やTR-808といった装置としてのビートボックスを人間の声で代替する行為であった。この新しい習慣は、1970年代から始まった。

Matela (2014) によれば、この習慣には、三つの利点があったとされている⁴²⁾。

第1の利点は、人間の声によるリズムパートの演奏は人目を引くこと、第2は当時はまだ大がかりな装置であったビートボックスよりも人間の声の方が、はるかに融通性があったこと、第3は人間の声は無料であったことである。

こうして、装置としてのビートボックスの音は、人間が模倣する対象となり、そして、それらの音を模倣することを“ヒューマンビートボックス”と呼ぶようになった。ただし、このような新しい習慣が生まれた当初はレジェンドと呼ばれるようなビートボクサーがいたわけではない。この習慣は草の根的に広まっていった。それゆえに、人間の口でリズムパートを表現する“ビートボクシング beatboxing”は、貧困層の文化の一部として取り込まれ、ヒップホップの要素に加えられるようになったと考えられる⁴³⁾。

なお、ビートボクサーのレジェンドと呼ばれる Doug E. Fresh、Buffy、Biz Markie といったビートボクサーが頭角を現すのは、この新しい習慣が登場した10年後の1980年代初頭になってからであるが、詳しくは後述する。

4. ビートボクサーの潮流

4.1 ヒューマンビートボックスの潮流を区分するオールド・スクールとニュー・スクールという考え方

芸術文化の領域において新たなスタイルが登場したとき、それまでのスタイルはオールド・スクール (Old school) と呼ばれるようになり、新たに登場したスタイルはニュー・スクール (New school)⁴⁴⁾ と呼ばれることがある。ヒューマンビートボックスにおけるオールド・スクールとニュー・スクールの区分については、海外ではヒップホップの音楽と同じ1990年代を境界とする考え方が一般的である。HUMANBEATBOX.COMの論考『A New School of Beatboxers』では、ヒューマンビートボックスのニュー・スクールは1990年代以降に現れた潮流と捉えており、インターネットの爆発的な普及を背景に登場した新たな演奏スタイルと考えられている (表1)。

オールド・スクールとニュー・スクールの違いは、様々な音楽のスタイルとの融和が図られているか否かという点が判断基準となる。例えば、ニュー・スクールのさきがけとして1990年代になって登場したイギリス人の Killa Kela

(1983-) のようなビートボクサーは、ハウス (house)、エレクトロ (electro)、ダブステップ (dubstep) 等の音楽のスタイルをヒューマンビートボックスで完全に再現するビートボクサーの先駆けとして、ニュー・スクールに分類される

⁴⁵⁾。その演奏は、ドラムなどのリズムセクションを単純に模倣することが多かったオールド・スクールの演奏とは異なり、ビートボックスという装置の代用という位置づけからは、完全に脱却した。

【表1】演奏スタイルの違いによるビートボクサーの区分⁴⁶⁾

【オールド・スクール】(～1990年) リズムセクションの模倣	【ニュー・スクール】(1990年～) 様々な音楽スタイルとの融和
<p>◆ ビートボクサー</p> <p>Doug E. Fresh (1966-)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ クリック・ロールという奏法の元祖 <p>Buffy (1967-1995)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ いわゆる“フガフガ・サウンド”を多用 <p>Emanon (1967-)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ のちに日本人ビートボクサーとユニットを結成 <p>Biz Markie (1964)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ “舞台用のピエロ”と通称された <p>◆ オールド・スクールに影響を与えたビートボクサー以外の人物</p> <p>Bobby McFerrin (1950-)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 人間の声のみを使った音楽で幅広いジャンルに影響 <p>Michael Winslow (1958-)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 自称“10,000種類の効果音を出す男” 	<p>◆ ビートボクサー</p> <p>Kenny Muhammad (1968-)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ K-snare という奏法の元祖 <p>Rahzel (1964-)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ “God father of Noise”と称されるビートボクサー <p>Scratch (生年不明)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ スクラッチ音の模倣技術に長けたビートボクサー <p>Kid Lucky (生年不明)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ “Beatrhythming”という技術に長けたビートボクサー <p>◆ バンド・ユニット</p> <p>THE ROOTS (1987-)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ Rahzel や Scratch が所属したヒップホップのバンド、日本人ビートボクサー Afra に多大な影響 <p>MB2000 (Baba, D.O.A, Emanon, Afra) (2000-)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ Afra のビートボクサーデビューのきっかけとなった

4.2 オールド・スクールを代表するビートボクサー

オールド・スクールを代表するビートボクサーとしては、レコードやCDデビューなどの実績⁴⁷⁾に基づいて列挙すると、Doug E. Fresh、Buffy (The Fat Boysのメンバー)、Emanon、そして、Biz Markieの4名⁴⁸⁾を代表的な人物として挙げるができる。

なお、ヒューマンビートボックスのオールド・スクールの区分では、上記の4名の他に、1980年代後半に登場したBobby McFerrinやMichael Winslowをビートボクサーに影響を与えた人物として挙げるがある⁴⁹⁾。彼らの音楽は、ヒップホップの音楽やヒューマンビートボックスとは異なるが、人間の口から発せられる音の可能性を高めた存在として、ニュー・スクールのビートボクサーに影響を与えたと考えられている。

◆ Doug E. Fresh

Doug E. Fresh (本名: Douglas E. Davis) は、1966年9月17日カリブ海のバルバドスで生まれたアメリカ合衆国在住のヒップホップの歌手である。Beatbox Battle TV取材(2010)の中で彼は次のように語っており自分こそがビートボクサーの元祖であると主張している。

ヒューマンビートボックスと呼ばれる音楽表現の方法は、自分自身が1982年に最初に始めた。当時は周囲では誰もヒューマンビートボックスをしている人はいなかった⁵⁰⁾。

しかし、彼の主張を裏付ける録音や録画などの記録は残っていないため、あくまでも元祖を主張する中の一人として認識すべきである。

Doug E. Freshは、1984年に同時に二つのレーベルからシングルCDを発売した。1枚はENJOY社(米国)からDoug E. Freshとして『Just Having Fun』を発売し、VINTEATAINMENT社(米国)からは、名前の綴りをDougy Freshに変えて、『The Original Human Beat Box』として発売した。そして1985年には、MC Ricky D(のちにSlick Rick)と、『La Di Da Di』が取められたアルバム『The Show』をCooltempo社(英国)より発売した。この曲は、多くのビートボクサーに影響を与えた最も古典的なヒューマンビートボックスの一つである。なお、Doug E. Freshは、1983年頃から“クリック・ロール (click rolls)”⁵¹⁾と呼ばれる表現技術を自らの演奏に取り入れた人物として知られている。

◆ Buffy

アメリカの3人組ラップグループの The Fat Boys (1982～1991、2008～) のメンバーの一人である Buffy (本名: Darren Robinson) (1967～1995) は、1967年6月10日ニューヨークのブルックリン区で生まれ、1995年に心臓麻痺で死亡した。Bill Boggs のインタビュー番組の中で、彼は次のように語っている。

ドラム (訳注筆者: 装置としてのビートボックスではない) が欲しかったが買えなかったため、レコードを聴いてビートを真似たのが自身のヒューマンビートボックスの始まりであり、その出来事は1975年(8歳)であった⁵²⁾。

しかし、彼のこの主張も録音録画などの記録に基づくものではなく、Doug E.Fresh と並んで、元祖を主張する中の一人として認識すべきである。

The Fat Boys は、1984年に『Human Beat Box』というタイトルの曲が収録されたアルバム『Fat Boys』を発売、1985年には『Fat Boys Are Back』が発売され、日本でも同年1985年に発売された。この時に日本版に封入されたライナーノートには、音楽評論家の村岡裕司が、国内で初めて“ヒューマンビートボックス”という用語を使って解説を書いている。(ワーナーパイオニア P-13208) これが日本国内において“ヒューマンビートボックス”という言葉が使用された最初であると考えられる。なお、Buffy は、“フガフガ・サウンド” (Hagga hagga sound)⁵³⁾ と呼ばれる、呼気と吸気の両方で声帯を振動させて作られる重低音を多用した人物として知られている。

◆ Emanon

Emanon (本名: Charles Andre Glenn) は、1967年にニューヨークのブルックリン区で生まれた。Emanon という名前は“no name”の逆読み⁵⁴⁾であり、ビートボクサーとしての活動の時に使われている名前である。ヒップホップのDJやプロデューサーとしては、Africa Islam と名乗り音楽活動をしている。Emanon は、1986年に Keith Haring (1958～) がジャケットをデザインしたことで有名なアルバム『The baby Beat Box』を発売、この他にも、シングルとして1986年に『Fresh Beats』、1987年に『Susie』、1990年に『I Came Back To Party』を発売した。なお、Emanon は、後ほど取り上げる Afra と1999年に出会い、後に Afra と共に MB2000 というグループを結成するこ

とになる重要な人物である。

◆ Biz Markie

Biz Markie (本名: Marcel Theo Hall) は、1964年4月8日アメリカ合衆国ニュージャージー州エッグハーバータウンシップで生まれた。1988年にアルバム『Goin' Off』を発売、その後、2003年までに5枚のアルバム、2010年までに9枚のシングルを発売している。Biz Markie は、ラップ音楽に積極的にヒューマンビートボックスを取り入れたビートボクサーであるが、ビートボクサーというよりも、「非常に楽しいキャラクターであり、舞台用のピエロ」⁵⁵⁾ のような存在として位置づけられている。また、その表現の中で取り入れられる“笑い声”は、直ぐに Biz Markie のトレードマークになった。そして、1989年に発売された Biz Markie の代表曲『Just A Friend』は、1990年全米チャート Billboard Top 100 で9位を記録している。

4.3 ビートボクサー以外でヒューマンビートボックスに影響を与えた二人の人物

◆ Bobby McFerrin

Bobby McFerrin (本名: Robert Keith McFerrin Jr.) は、1950年3月11日に、ニューヨークのマンハッタンで生まれた。ジャズ歌手であるボビーは、その多彩な声の種類から、しばしば器乐的唱法⁵⁶⁾ をもつ歌手と称され、また、これまでにグラミー賞を10回受賞している。1988年には、全て自身の声による多重録音の作品『Don't worry, Be Happy』が収録されたアルバム『Don't worry, Be Happy』が発売された。この歌は日本国内でも様々なテレビ番組のBGMやCMで使用された。また、翌年1989年には、アメリカの子ども向けテレビ番組セサミストリート (Sesame Street) に出演し、子どもたちの歌に合わせてビートボクサーのようにリズムを刻んだり、メロディーやベース音を奏でたりする様子が放映された。Bobby McFerrin は、ビートボクサーを自称しないものの、人間の声のみを使った直接的模倣音を多用する人物として、ヒップホップの音楽へ影響を与えた⁵⁷⁾と考えられている。

◆ Michael Winslow

コメディアンであり俳優でもある Michael Winslow (本名: Michael Leslie Winslow) は、1958年ワシントン州スポケーンで生まれた。元々俳優を目指していたが、テレビのオーディション番組 The Gong Show の音楽で映画の効果音などを声帯模写し、一躍有名になった。そして、

1984年の映画『ポリスアカデミー』への出演をきっかけに、日本国内でも広く認知されるようになり、日本石油（当時）のテレビコマーシャル『日石ダッシュレーサー100』（1988）では、ビートボクサーとしてではなく、自称“10,000種類の効果音を出す男”として出演した。Michael Winslowは、ヒップホップの音楽出身ではなく、ましてやビートボクサーでもない。しかし、人間の声のみを使った直接的模倣音を創り出す人物として、前述のBobby McFerrinと共に、多くのビートボクサーに影響を与えた⁵⁸⁾と考えられている。

4.4 ニュー・スクールを代表するビートボクサーたち （～2003年）

Afraが直接関わりをもったのは、1990年以降のニュー・スクールのビートボクサーたちである。1990年以降、ニュー・スクールのビートボクサーは多数登場してきたが、Afraが日本国内でCDデビューする2003年までを一区切りとして、Afraと関わりがあったビートボクサーを整理してみたい。

◆ Kenny Muhammad

Kenny Muhammad（本名同じ）は、1968年12月3日に、ニューヨーク州で生まれた。別名“人間オーケストラ”（Human Orchestra）としても知られ、ヒップホップの音楽だけでなく、ジャズ、ロック、レゲエ、サルサ、ハウス、テクノといった様々なジャンルの音楽のスタイルと融和することに成功しており、1991年には、Kenny Xの名で、3週連続アポロシアターでの勝利（ショータイム部門）を取めた。また、2005年には、ニューヨーク交響楽団で、『ケニー・ジョイ（Kenny's Joy）：デヴィッド・イートン（David Eaton）作曲』という作品で、管弦楽との共演を果たしている。また、のちに「Kスネア（Keh-snare）」と呼ばれるようになったスネアドラムの直接的模倣音の技術を最初に一般化した人物としても知られている。なお、Kスネアとは、インワード・ボイス（inward-voice）と呼ばれる吸気によって発音する技術の一つで、ヨーロッパのビートボクサーたちの間で大変人気のある技術になったと言われている⁵⁹⁾。

Kenny Muhammadは、Doug E. FreshやBuffyがデビューする3年前の12歳（1980年）の夏に、今日的な意味での、いわゆる「ヒューマンビートボックス」を始めた。その頃Kennyが耳にしていたのは、Earth Wind & Fireや、James Brownといったアーティストの音楽であった。そ

して、ジャマイカに滞在中、初めてThe Fat Boysの演奏を聴き、それがヒューマンビートボックスと呼ばれていることを知った⁶⁰⁾。

Kenny Muhammadは、Summer Stage2000に、Kenny Muhammad&MB2000として出演しており、Afraのアメリカデビューに関わった人物としても極めて重要な存在である。

◆ Rahzel

Rahzel（本名：Rahzel Manely Brown）は、1964年10月6日にニューヨーク州ニューヨーク市で生まれた。THE ROOTSの元メンバーであり、重厚なドラム音やゲームの効果音など多彩な音を得意とすることから、ビートボクサーの間では、“Godfather of Noise”とも呼ばれている⁶¹⁾。1999年に初のソロアルバム『Make the Music 2000』を発売し、2004年には、『Rahzel's Greatest Knock Outs』を発売した。なお、Rahzelについては、「ビートボクサーを目指そうとするきっかけを与えた人物の一人である」⁶²⁾とAfraは語っている。

◆ Scratch

Scratch（本名：Kyle Jones）（生年不明）は、ニュージャージー州カムデンで生まれた。文字通りターンテーブルのスクラッチ音を口で模倣する技術に長けたビートボクサーであり、THE ROOTSの元メンバーである。ScratchもまたAfraに大きな影響を与えたとされている。Scratchは2002年に初のソロアルバム『The Embodiment of Instrumentation』を、2009年には『Loss 4 Words』を発売している。

◆ Kid Lucky

Kid Lucky（本名：Terry Lewis）（生年不明）は、ニューヨーク市で生まれた。ビートボクサー、シンガーソングライター、教師などの多彩な活動分野をもつビートボクサーである。2018年にはビートボクサーとして活躍すると共に、“Beatrhyming”（ビートライミング）の技術開発への功績が称えられ、グラミー賞特別功労賞を受賞している。

“Beatrhyming”とは、ビートを直接的に模倣しながら、同時に韻を踏む歌詞を歌ったり発したりする技術である。このような技術は、Rahzelもおこなっていたが、2000年頃からKid Luckyが多用するようになったと言われている⁶³⁾。

この他、Kid Luckyは、ビートボクサーの制作会社である“Beatboxer Entertainment”を2002年に設立し、アメリカ国内のメディアにビートボクサーが商用出演する機会を創り

出すことに貢献した。なお、この会社が主催するイベントには当時ニューヨークに滞在していた Afra も参加することがあった。

4.5 ニュースクールを代表するバンドやユニット

◆ THE ROOTS

Afra がビートボクサーを目指そうとするきっかけを与えた 1987 年結成のヒップホップのバンドであり、Rahzel や Scratch といったメンバーを抱えていた。1993 年に『Organix』という初アルバムを発売、現在までに 13 枚のアルバムをリリースしている。ターンテーブルやサンプリングマシンを使わず、いわゆる“生音”を使ってヒップホップの音楽を演奏するバンドとして有名である。

◆ MB2000 (Baba, D.O.A, Emanon, Afra)

Baba Israel, D.O.A, Emanon らが共に活動するときのユニットである。2000 年の Summer Stage で Kenny Muhammad の前座を務めるユニットとして活動を始めた。演奏の機会毎にメンバーの組み合わせが替わることがあったため、MB2000 のメンバーを D.O.A, Emanon, Afra の 3 名としたり、Baba, Emanon, Afra の 3 名としたりする場合があるが、最初の舞台である Summer Stage では、後者 3 名の組み合わせで出演している。詳しくは後述するが、このユニットは Afra がビートボクサーとしてデビューするきっかけとなった重要なユニットである。なお、このユニットは、ヒップホップの DJ たちの歴史と思想やスタイルを描いたミュージック・ドキュメンタリー映画『SCRATCH』⁶⁴⁾にもそのライブ映像が使用されており、その中で、日本人ビートボクサーとして、初めて Afra が記録映像に登場している。

5. 日本人ビートボクサーの誕生と日本での受容

日本人初のビートボクサーは、Afra (本名:藤岡章)である。Afra は、日本国内では、“ボイスパーカッション (ボイパ)”あるいは“ハモネプ”といった言葉しか知られていなかった 2000 年 7 月 10 日 (月)、ニューヨークのセントラルパークで毎夏開催される音楽イベント“Summer Stage”⁶⁵⁾に、日本人初のビートボクサーとして出演した。Afra はこの後、日本のヒューマンビートボックスの萌芽期をつくっていくことになる。「5.」では、日本のヒューマンビートボックスの受容の過程を年表に整理し、



萌芽期における Afra の功績を経歴と世界のビートボクサーとの関係性ととも記述する (表 2)。

5.1 ヒューマンビートボックスを認識する前の Afra (1980～1989年)

Afra は、1980 年に静岡県賀茂郡松崎町大沢で生まれた。この年には Roland 社の TR-808 というリズムマシンが発売された。このマシンが後にこのジャンルを「ヒューマンビートボックス」と呼ぶ命名に深く関わることになる。また 4 年後には、前述の Doug E. Fresh や Buffy といったオールド・スクールのビートボクサーがデビューしている。さらに、Afra が小学 1 年生になる 1986 年までには、後にレジェンドと呼ばれるオールド・スクールのビートボクサーたちが相次いでデビューした。

1984 年には、Doug E. Fresh と Buffy がヒューマンビートボックスを含むアルバムを発売、同年、Michael Winslow が映画『ポリシアカデミー』に初出演している。この映画の中には、ヒューマンビートボックスと呼べる演奏が含まれている。しかし、当時の Afra はそれをヒューマンビートボックスとは認識せず、「あくまでも声帯模写の延長線上にあるコメディとしておもしろいと感じただけだった」⁶⁶⁾と語っている。続いて 1985 年には、Slick Rick (別名: MC Ricky D) & Doug E. Fresh による『La Di Da Di』が発売された。1986 年には、後にユニットを結成し、Afra のビートボクサーとしての活動に決定的な影響を与えることになる Emanon が、初アルバム『The Baby Beatbox』を発売した。

1988 年には、Afra に音楽的影響を与えたニュー・スクールのヒップホップの音楽グループ“A TRIBE CALLED QUEST” (1985-1998,2006-) がデビュー、Bobby McFerrin によって、全て肉声で創られた『Don't Worry, Be Happy』も発売された。さらに、日本国内では、Michael Winslow が『日石ダッシュレーサー 100』というテレビ CM に出演し、発声器官だけによる直接的模倣音の存在が広く一般に知られるようになった。

このように、オールド・スクールのビートボクサーたちが相次いでデビューする中、Afra は映画やテレビ CM などを通じて Michael Winslow の存在は知っていたものの、Doug E. Fresh や Buffy らについてはまだ知るに至らなかった。

5.2 ヒップホップへの傾倒とヒューマンビートボックスという音楽表現の認識 (1990～1995年)

1990 年から 1996 年まで日本テレビ系列制作による『天

【表2】Afraの経歴と世界のビートボクサーの関係

年	Afraの経歴	日本におけるヒューマンビートボックスの動き	世界の動き
1975			Buffyがヒューマンビートボックスを開始したと主張する年
1979			リズムマシン ELI 社 CR-7030 発売 (商品名: Beat Box)
1980	1月29日誕生 (0歳)		リズムマシン Roland 社 TR-808 発売
1982	2歳		Doug E. Fresh がヒューマンビートボックスを開始したと主張する年
1984	4歳		Doug E. Fresh: 『Just Having Fun』 (シングル) 発売 『The Original Human Beat Box』 (シングル) 発売 Buffy: 『Fat Boys』 (アルバム) 発売 Michel Winslow: 映画『ポリスアカデミー』に出演
1985	5歳	Fat Boys のアルバム『ライオンート』に、日本国内で初めて「ヒューマンビートボックス」という呼称が登場	Fat Boys: 『Fat Boys Are Back』 (アルバム) 発売 Doug E. Fresh & Slick Rick (元 MC Riky D): 『La Di Da Di』 (シングル) 発売
1986	6歳 (小1)		Emanon: 『The baby Beat Box』 (アルバム) 発売
1988	8歳 (小3)	Michael Winslow 出演の TVCM (目石ダッシュユーザー 100) が放映され、人間効果音として知られるようになる。	Biz Markie: 『Make the Music with Your Mouth, Biz』 (Goin' Off) (アルバム) に収録 発売 Bobby McFerrin: 『Don't Worry, Be Happy』 (アルバム) 発売
1990	10歳 (小5)	『ダンス甲子園』に感化される。	
1991	11歳 (小6)	テレビ番組『ダンス甲子園』放映	
1993	13歳 (中2)		Kenny Muhammad: 双子の弟 Keith と共に Kenny X としてアポリアターで3週連続勝利 (シヨータイム部門)
1994	14歳 (中3)	Lifers Group を知る。	THE ROOTS (Rahzel, Scratch が所属): 『Organix』 (アルバム) 発売、Hip Hop バンド部門でラミー賞受賞
1995	15歳 (高1)	大阪市立工芸高校 美術科に進学。高校合格で父親に買ってもらったレコーダーで THE ROOTS を知る。	
1996	16歳 (高2) 夏休み 5歳年上の姉と共に渡米し、サマー・ステージを体験。A TRIBE CALLED QUEST の演奏がキッカとなり、ヒューマンビートボックスを始める。Rahzel の演奏をテープレコーダーで録音して、自分で様子を想像しながら練習する。	秋に、THE ROOTS が大阪に来日。	
1997	17歳 (高3)	人前で初演奏 (高校の合唱コンクール)	
1998	18歳	大阪でアルバイトをしながら、友人が出てきているライブイベントにアマチュアとして出演し「韻シスト」というバンドに出会う。5歳年上の姉と共に渡米し、サマー・ステージを体験	
1999	19歳 (～4年間) 渡米し、非営業でヒューマンビートボックスを演奏する。 ・ビートボクサー BABA を通じて、Kenny Muhammad や D.O.A.、Emanon と顔見知りになる。 ・Kenny Muhammad & MB2000 (Afra, BABA, D.O.A., Emanon) というチームを結成する。	・Rahzel のアルバム発売記念パーティー終了後、終電を逃す。 ・Emanon と顔見知りになる。 ・このチームを結成する。	Rahzel: 『Make the Music 2000』 (アルバム) 発売、発売記念パーティー開催
2000	20歳 ・サマー・ステージの Rahzel の前で、MB2000 の一員としてデビュー。 (7月10日)		MB2000 (BABA, D.O.A., Afra, Emanon) Summer Stage (Central Park) に出演
2001	21歳	第1回ハモネブリーグ (2001, 2002, 2007-2015) が始まる	インターネット・コミュニティ『HUMANBEATBOX.COM』がIyeteらによって設立される。
2002	22歳	オプ・プロモーター映画『SOULAR POWERID』に出演 ・ドキュメンタリー映画『Breath control』に出演	Scratch: 『The Embodiment of Instrumentation』 (アルバム) 発売 (当時 Afrika B'Boyz が所属) Joeey Garfield 監督『Breath control』制作 (ヒューマンビートボックスのドキュメンタリー映画)
2003	23歳	藤井進午と出会い、日本初の全編ヒューマンビートボックスの1st. アルバム『Always Fresh Rhythm Attack』発売 鈴木雅彦と出会い、深夜のテレビ番組に出演する。	
2004	24歳 ・テレビCM『FUJI ZEROX』テレビ番組「笑っていいとも」に出演 ・本格的に国内でのライブ活動を開始する。 ・「ハモネブ」が流行する。国内でホイバ、ポイスパーカッションという名称が知られるようになる。		
2005	25歳		BeatBoxBattleWorldChampionship が始まる。

才たけしの元気が出るテレビ』というテレビ番組の中で、『ダンス甲子園』というコーナーが放映されていた。当時小学5年生だったAfraは、このコーナーで取り上げられるダンス・ミュージックに傾倒していった。このコーナーの視聴がきっかけとなり、Afraはヒップホップの音楽に徐々に興味をもつようになった。

Afraは、1994年1月に放映されたテレビ番組『たけし・さんま世紀末特別番組!! 世界超偉人伝説』（日本テレビ制作）で紹介された“Lifers Group”と呼ばれる終身刑の囚人によるラップ音楽グループの演奏に関心をもつようになった。Afraは、牢獄の中でマイクを使って口で鳴らすドラム音（ビート）に、格好良さだけでなく、魂の叫びのようなラップ音楽の根底に流れているものを感じていたと述べている。

この番組を視聴した時点では、Afraはヒューマンビートボックスに興味を持ったのではなく、そのルーツであるヒップホップの音楽に強い興味をもったという段階である。しかし、ヒップホップの音楽から徐々にヒューマンビートボックスへ傾倒していくという流れが、ビートボックスとしての正統性をAfraに与えることに繋がっていったと考えられる。なぜなら、ヒューマンビートボックスの発祥は、「3.」で述べたように、ニューヨークの貧困層を背景としたヒップホップの音楽と切り離せないからである。

1995年、大阪市立工芸高校美術科に進学したAfraは、のちにニュー・スクールのビートボックスとして活躍することになるRahzelやScratchが所属する“THE ROOTS”(1987-)というヒップホップの音楽バンドのLPレコードを高校の合格祝いとして入手した。このバンドは、DJ（ディスクジョッキー）がターンテーブルを使って発生させるスクラッチ音を、楽器や人間が発する音の生演奏でおこなう異色のバンドである。このバンドのアルバム『Do you want more ???!!?』の中に、ドラムと人間（ヒューマンビートボックス）との対決を音で表現した『? Vs. Rahzel』が収録されており、口だけで多彩な音を創り出す様子に、Afraは強い興味を覚えた。そして、このLPレコードが、Afraにヒューマンビートボックスという音楽表現の存在を認識させるきっかけを与えた。

5.3 Afraにヒューマンビートボックスを始めるきっかけを与えたRahzel (THE ROOTS)の生演奏(1996年)

1996年、Afraは高校2年生の夏休みを利用して、5歳年上の姉と共にニューヨークを訪れた。ニューヨークを初

めて訪れたAfraは、毎年セントラルパークで開催されている音楽イベントSummer Stageへ向かった。このイベントは、1986年から開催されており、毎年6月から9月までの夏季に、世界各地の音楽やアメリカの音楽、モダンダンスや電子音楽、そして、家族向けのコンサートプログラムまで、100を超える多彩なコンサートが開催される。これらのコンサートは、一部は有料チケット制であるが、多くは無料で楽しめるため、毎年多くの人がこれらのコンサートを訪れている。

Afraが初めてニューヨークへ渡った1996年のSummer Stageには“A TRIBE CALLED QUEST”の出演も予定されていた。このグループは、この年4枚目となるアルバムを発売し、当時ヒップホップで人気絶頂にあり、Afraは大きな関心を寄せていた。ところが、このグループの演奏は当日になって突然キャンセルとなり、THE ROOTSが代理演奏することとなった。THE ROOTSは、Afraが高校合格の時に初めて手にしたLPレコードのバンドであり、予定されていた有名グループがキャンセルした結果、AfraはビートボックスのRahzelが所属するTHE ROOTSの生演奏を聴く機会を偶然得た。この出来事が、Afraにヒューマンビートボックスを始めるきっかけを与えることとなる。

5.4 Rahzelを手本にヒューマンビートボックスの独学を開始(1996～1997年)

1996年の秋に世界ツアーを開始したTHE ROOTSが大阪に来日し、Afraは再びRahzelの生演奏を聴く機会を得た。この時の公演をAfraはテープレコーダーで録音し、様々な音の出し方について試行錯誤を繰り返す中で自分なりに習得していった。こうしてRahzelを手本としてAfraのヒューマンビートボックスの独学が始まった。Afraが行なった独学は、ヒューマンビートボックスという音楽表現の成立過程の中で重要となった“模倣”という行為そのものである。「1.2」でも述べたように、今日では、ヒューマンビートボックスの演奏技法の殆どがインターネット上で公開されており、音作りに関しては聞き取って模倣するのではなく、技術を習得して発音するという流れが主流になっている。しかし、Afraには当時そのような環境が一切なかった。このことが、自らの耳で聴き、自らの身体を駆使して演奏を模倣するというヒューマンビートボックスの原点をAfraに辿らせることに繋がっていく。

Afraが主に手本としたのはRahzelの『If Your Mother Only Knew』という曲である。この曲は、RahzelがAaliyah Dana

Haughton の歌う『If Your Girl Only Knew』をカバーした曲であり、Rahzel は原曲の歌詞にある「Girl」を「Mother」に替えて歌っている。歌詞の変更は、軟口蓋を調音点とする「G」よりも唇を使用する「M」を語頭にもつ単語の方が、歌とビートという二つの音を同時に発音しやすいためである。Afra は独学する中でこのことに気づいた。そして、Afra は Rahzel の持ち歌をそのまま真似るだけでは自分の表現としては確立できないと考え、ビートを乗せやすい日本語の歌を探し始めた。そして、“SUKIYAKI”として世界的に知られていた永六輔（作詞）、中村八大（作曲）、坂本九（歌）『上を向いて歩こう』にビートを乗せることを試みた。

ヒューマンビートボックスは、使用する音の発音技法を習得するだけでは演奏としては成立しない。音のつながり方やまとまり、起承転結といった音楽としての構成力も要求される。Afra は、ヒューマンビートボックスの発音技法と構成力の両方を、“Godfather of Noise”とも呼ばれる Rahzel の演奏から独学で吸収していった。発音技法に留まらず、構成力までも模倣していくという姿勢が、Afra に、文化的背景や演奏のスタイルなどの正統性をもたらすことに繋がっていったと考えられる。

1997年には、高校生活最後の合唱コンクールで、クラスの仲間がパーカッション・グループ STOMP の物真似をする中、独学したヒューマンビートボックスを披露した。この演奏が、ビートボクサー Afra の人前での初演奏となった。

5.5 ラッパー MC Afra としての国内での活動(1998年～)

1998年に高等学校を卒業した Afra は、大阪でアルバイトをしながら、友人が出演するライブイベントにアマチュア・ラッパーとして出演していた。その時に、1998年に大阪で結成された「韻シスト」という名のヒップホップの音楽のバンドと出会い、セッションに参加している。1998年当時の様子を、韻シストのメンバーの Shyoudog は、「今はバンドセットで演奏できる環境が整っているクラブがいっぱいありますけど、昔はホンマなかったですね。だから、バンドとヒップホップのアーティストと一緒にやる機会はほとんどなくて」⁶⁾と語っており、高校を卒業したばかりとは言え、実際に生バンドの音に乗せてラップを刻める Afra は、大阪ではとても貴重な存在であったことがわかる。ただし、この頃の Afra はビートボクサーとしてではなく、あくまでも MC Afra というラッパーとして仲間内で知られるようになっていたという段階である。

5.6 THE ROOTS の新メンバー Scratch を手本にヒューマンビートボックスの独学が進展 (1998年)

1996年に THE ROOTS が大阪に来日した。THE ROOTS はセントラルパークで Afra に初めて Rahzel の生演奏に触れる機会を与えたアーティストである。THE ROOTS は 1998年にも来日し、そのメンバーにビートボクサーの Scratch が加わっていた。Scratch は、レコードのターンテーブルから発せられるスクラッチ音を口で直接的に模倣することを得意とするビートボクサーである。Afra は、Scratch の演奏を、Rahzel の生の演奏に触れたときと同じようにテープレコーダーで録音し、再び独学で発音技法や構成力を習得していった。それらの中でも、スクラッチ音の模倣を挟みながらラップを口ずさんでいくという演奏は、当時としては画期的であった。なぜなら、当時のヒップホップの音楽において DJ と MC に分担されていたスクラッチ音とラップという役割を、一人のビートボクサーに統合することを可能にしたからである。

このように、Afra は THE ROOTS というバンドの存在によって、生バンドによるヒップホップの音楽に興味を抱き、テープレコーダーの録音から、Rahzel や Scratch がおこなっていたヒューマンビートボックスの発音技法や構成力を独学で学んだ。一見すると非効率的に映るこの方法は、ヒューマンビートボックスのルーツや精神性といった部分までを、Afra が包括的に習得することに繋がったと考えられる。

5.7 Summer Stage に出演することになったきっかけ (1999年)

1999年、19歳になった Afra は、再びニューヨークへ渡った。それから 2003年までの4年間、Afra はニューヨーク郊外のロングアイランドを皮切りに、ブロンクス、ブルックリンと居を移し、最終的にはマンハッタンのハーレムで生活するようになった。当時の Afra は MC Afra と名乗り、アマチュアのラッパーとして、様々なライブハウスで活動をしていた。“Afra”という呼び名は、本名の Akira (章) とアフリカのを意味する Afro を掛け合わせたものである。また、“Afra”という名前の由来について、Always Fresh Rhythm Attack の頭文字を取ったという解説は、“Afra”と名乗り始めてから、後付けで考えられた解説であると本人は述べている。

Afra が渡米した 1999年は、THE ROOTS に所属していた Rahzel が初のソロアルバムを発売した年でもある。この発売記念ライブに Afra は観客として参加した。ライブ

には Rahzel の前座として、Kenny Muhammad、D.O.A.、Emanon という3名のビートボクサーと、ラジオDJの Lord Sear が招待されていた。このメンバーのうち、Kenny Muhammad、D.O.A. と Emanon は、のちに Afra とユニットを結成することになる重要な人物である。

Rahzel のソロアルバム発売記念ライブの終了後、偉大なビートボクサーに囲まれた Afra は、終電を逃してしまった。Afra は帰宅できなくなり、サブ・ステージにたまたま出演していた DJ SPAZE KRAFT の家にその夜泊めてもらうこととなる。Afra は、1996年の夏に初渡米した際に立ち寄った店の飛び入り参加イベント“ELEVATED”で、SPAZE KRAFT と出会った。このイベントでは、他にもビートボクサーの Baba Israel や、Akim Funk Buddha とも出会った。彼らはビートボクサーでもあり、後にヒップホップの舞台演出家として日米交流プログラムにも参加することとなる。その夜、SPAZE KRAFT 宅にはラッパーでビートボクサーでもある TES が録音に訪れ、すぐさま意気投合し音楽活動を共にしていくこととなる。また、Afra は Baba Israel を通じて既にビートボックス界で名の知れていた Kenny Muhammad や D.O.A.、Emanon にも紹介された。このようにして、終電を逃してしまったことがきっかけで、Afra はビートボクサーたちと偶然出会うことができた。

2000年に Afra は Kenny Muhammad & MB2000 (Afra, BABA, D.O.A.、Emanon) を結成し、Rahzel の前座として Summer Stage に出演し、ビートボクサーとして、アメリカでデビューする。

2002年には、Full Circle という B-Boy と B-Girl (ブレイクダンスを踊る男性と女性の意) のクルーが主催・制作したヒップホップ・ミュージカル『SOULAR POWER'D』に出演し、オフ・ブロードウェイでのデビューも果たした。さらに、同年、ヒューマンビートボックス初のドキュメンタリー映画『Breath control』が、Joey Garfield 監督によって制作され、日本人で唯一 Afra が、MB2000 のメンバーとして、この映画に出演している。

5.8 日本国内での“ボーパブーム”の到来と日本への活動拠点の移動 (2000～2003年)

Afra がビートボクサーとしてアメリカで頭角を現し始めた2000年は、日本国内では、まだヒューマンビートボックスという用語は広まっておらず、ビートボクサーを名乗る演奏家も出現していなかった。しかし、フジテレビ系列で放映された『力の限りゴーゴゴー』という高校生を中心

とした若者向け青春バラエティ番組 (2001年5月～2002年9月まで放映) のコーナーがきっかけとなり、“ボイス・パーカッション”あるいは“ヴォイス・パーカッション”という用語が広まり始め、用語や音楽表現としてのヒューマンビートボックスが定着していくための素地が形成されていった。

この番組のコーナーには、「3人以上のグループ」「楽器を使わず声だけでハーモニーを奏でる」「1分30秒以内のパフォーマンスを行う」という三つの条件を満たすア・カペラ・グループを、全国から発掘するという企画があった。ア・カペラ・グループが奏でるハーモニー (=ハモ) を競い合うという意味と、番組の司会者がお笑いトリオのネプチューン (=ネプ) であったことから、このコーナーの名称は“ハモネプ・リーグ”と呼ばれていた。このコーナーに出演していたア・カペラ・グループは、メイン・ボーカル1名、サブ・ボーカル数名、ベース・ボーカル1名、ボイス・パーカッション⁶⁸⁾1名の合計4～5名といった構成が中心であり、それぞれが自分たち固有のパートを担当していた。

このように、日本国内でヒューマンビートボックスの素地が徐々に形成されていく中、Afra はニューヨークを拠点に活動を続けていたが、同居していた姉・真希の死去より、2003年に活動の拠点を日本へ移すことになった。

5.9 国内デビューとそのきっかけを与えた人物 (2003年～)

日本への帰国がきっかけとなり、Afra は、日本国内での基盤固めを支援してくれる人物と出会うことになる。その一人が、Afra の演奏を実際に大阪のクラブで観たという藤井進午 (ODDJOB 社の社長) である。藤井の働きかけにより Afra は、全曲がヒューマンビートボックスで構成されたアルバム『Afra: Always Fresh Rhythm Attack!! : 2003』 (ODDJOB RECORDS ZBCB-1004) を、2003年に ODDJOB 社から発売した。全曲がヒューマンビートボックスで構成された CD は、日本初であった。

また、姉の死をきっかけに集まった親族の中にいた従兄弟の鈴木雅彦は、TBS 系列のテレビの深夜番組『Pooh!』の番組制作ディレクターを務めており、この番組への出演を依頼した。この番組に出演した Afra の姿は、たまたまその番組を見ていた (株) 富士ゼロックス広報担当者の目に留まり、Afra が新商品“DocuCenter Color f450”のCMに起用されることになる。一人で何でもこなすビートボクサーとこの会社で発売予定のマルチコピー機 (コピー、プ

リントナー、スキャナー、ファックスの複合機)には共通点が多いという理由である、2004年から放映されたこのCMは、Afraが一人でヒューマンビートボックスをするバージョン、二胡と共演するバージョン、バイオリンと共演するバージョンの3つがあり、ヒューマンビートボックスという用語が一般的ではなかった日本国内のテレビで繰り返し放映された。その映像がもたらした影響は大きく、DaichiやTATSUYA、HIKAKINといった現在の日本を代表するビートボクサーがヒューマンビートボックスを目指すきっかけを与えた映像の一つになると同時に、日本のヒューマンビートボックスの萌芽を語る時の資料にもなった。

このCM映像にマスコミ各社は直ぐに反応した。2004年5月31日発行の週刊誌『AERA』(朝日新聞社)では、「同時に三つの音を出す男」として紹介され、鍛え方によっては、人間の口腔を使った音楽表現は、まだまだ進化の余地があると称された。

そして、2005年には、渡米中ニューヨークで知り合った歌手の^{アイ}A Iからの紹介で、フジテレビ系列のワイドショー番組“笑っていいとも”の“テレフォンショッキング”というコーナーに出演し、司会者のタモリのでたらめな中国語ラップとのセッションをおこなった。テレビ番組への出演は、ビートボクサーを全く知らない人たちに、ヒューマンビートボックスという音楽表現の存在が認知されるきっかけとなった。

5.10 ヒューマンビートボックスの受容における Afra の正統性

「5.1」から「5.9」では、Afraがビートボクサーとしてアメリカで受け入れられ、その後日本でデビューするまでの流れを俯瞰した。Afraによれば、自分がヒューマンビートボックスの存在を認識し始めた1995年頃は、レコード店へ足を運んで店員にヒューマンビートボックスを探していることを告げても、逆にそれは何かと問われたり、リズムボックスで作られた音楽を出されたりしたという。ニュー・スクールと呼ばれるビートボクサーが出現する1990年代であっても、日本ではヒューマンビートボックスという概念は一般的ではなかった。

2001年以降、ヒューマンビートボックスという概念より先に、いわゆる“ボイパ”がテレビ番組を通じて広まり、人間の音声を歌声以外に活用する音楽表現の存在が日本においても知られるようになった。それまでは一部のヒップホップの音楽愛好家にしか知られていなかったヒューマン

ビートボックスが、一般大衆に浸透するかもしれないという出来事であった。しかし、浸透したのは、あくまでも楽器などの音を模倣するという表面的な部分だけであって、ヒューマンビートボックスの文化的背景や耳で聞いて再現するという本質的な部分までが浸透したわけではない。

日本が“ボイパブーム”に沸く前年の2000年に、Afraは、日本より先にアメリカでビートボクサーとしてデビューした。Afraは、日本の“ボイパブーム”についてはニューヨーク在住の日本人の友人が持っていたビデオテープを観るまで知らなかった。しかし、日本国内でのこのようなブームを知らなかったことが、かえってビートボクサーとしての正統性をAfraに与えることに繋がったと考えられる。それは以下の理由によると考えられる。

第一の理由は、Afraはヒューマンビートボックスに関して、単に音の出し方のみを体得したのではなく、ストリートカルチャーとして発祥した地で、数々のビートボクサーたちに受け入れられながら演奏技術を磨いていったという点である。

「3.2」で述べたように、ヒューマンビートボックスは、元来、ヒップホップを源流とする音楽表現であり、ストリートカルチャーとしてニューヨークを中心に根付いていった。Afraはアメリカで、“サイファー cypher”と呼ばれる、路地裏などで自然発生的におこなわれるラッパーたちの輪の中に入り、ストリートカルチャーとしての本質的な部分を肌で感じ、そこに集うラッパーたちとビートを刻みあう中で、ニューヨークのビートボクサーらに受け入れられていったのである。

第二の理由は、チュートリアルがない時代に、自らが試行錯誤する中で、音の出し方や演奏スタイルを確立していったという点である。「5.4や5.6」で前述したように、Afraは自分が目指すビートボクサーの音を、RahzelやScratch演奏の録音などを通して自分の耳で感じ、自らのオリジナルな要素を加えて演奏しようと努力した。この試行錯誤を繰り返した独学の過程こそ、ヒューマンビートボックスがもつ模倣性と構成力という重要な要素をAfraに醸成させる機会を与えたと考えられる。

Afraが影響を受けたのは、オールド・スクールの流れを汲むビートボクサーたちであり、インターネット等を通じて様々な情報が手に入る今日のビートボクサーは、Afraに対して“古臭いビートボクサー”という印象をもつかもれない。しかし、Afraはアメリカで初めて受け入れられた日本人ビートボクサーであり、ストリートカルチャー

を由来とするヒューマンビートボックスの正統性を有する存在として、日本におけるヒューマンビートボックスの概念形成の原点に位置づけることができる。

6. 日本におけるヒューマンビートボックスの今後

筆者は本稿を書き上げるまでの過程で、複数のビートボックスと直接関わりを持つことができた。Afra との話の中で特に印象に残っているのは、テープレコーダーでビートボックスの音を録音し、それを何度も繰り返して聞きながら発音技術を習得したという独学の方法である。この方法は、映像を伴わないので、演奏している時の口元の様子などは記憶を思い起こすしかなく、音を聞いて発音をあれこれと試してみるしかないという方法であった。ビートボックスが使用する代表的な音の発音技術については、今日では動画のチュートリアルで習得することが可能になってきている。したがって、Afra がかつて行っていたような、テープレコーダーで音を聞きながら自分で発音技術を考えるとといった方法は、若手のビートボックスには非効率的に映るだろう。

しかし、このような過程にこそ、ヒューマンビートボックスの本質が隠されているのではないだろうか。なぜなら、このような Afra の姿は、かつてビートボックスと呼ばれた高価な装置の音を自らの耳で感じ、口で再現しようとした人たちの姿と重なり合うからである。日本では“ボイパ”が先行し、ヒューマンビートボックスという概念は未だ形成途中である。しかし、ヒューマンビートボックスは将来的には“声による音楽表現＝声楽”という従来の枠組みを拡張させていく存在になり得るように思われる。

ヒューマンビートボックスは、人間が発した音を使っていれば、それ以上細かな決めごとはない。これからますます様々な表現との連携や融和を図ることが可能であると考えられる。しかし、自らの身体で作られる音でどのような表現を構成するかは、ビートボックス自身に委ねられている。この点にヒューマンビートボックスの独自性・芸術性が認められるのではないだろうか。

今後、筆者が注目するのは、人間の身体だけでどのような音楽表現が可能なのかを解明することである。これはヒューマンビートボックスに限らず、人間の身体によって表現可能なあらゆる音楽を含む概念である。これを追究するためには、我々の身体からどのような音を発することができるのかという、地道なサンプリング調査とその分析手

法の開発が課題となる。そして、「2.」で示した、「音響分析と発音技術の解明」「発音技術の共通化と技術の指導法の簡易化」を進め、ヒューマンビートボックスを、学校教育などの音楽教育で活用することの意義と効果を論じていきたい。

【注】

- 1) 日本音響学会編『新版音響用語辞典』(2004、コロナ社)では各器官は以下のように定義されている。「音声器官」は、動物や人間が音声を生成するときに使われる器官の通称。人間では、喉頭、咽頭・口腔・鼻腔などの発話器官を意味する。「発話器官」は、人間が音声を出すのに必要な器官の総称。発声器官と調音器官を含む。通常、口唇、下顎、舌、軟口蓋、咽頭などの運動器官をおもに意味するが、口蓋や歯などの不動器官を含むこともある。「調音器官」は、声門より上の発話器官。発話機構は発声と調音に分けられるが、このうち後者に関する器官を総称したもの。本稿では、人間が音声を産出する器官という意味で、音響学や音声学で用いられている「発話器官」という用語を使用する。なお、医学では、調音器官の働きを「構音」と呼び、その器官を「構音器官」と称している。
- 2) Tyte, Gavin. 2005. “What about Indian music?” Pre-History of Beatboxing: HUMANBEATBOX.COM Article of Beatboxing Part 1: <https://www.humanbeatbox.com/articles/history-of-beatboxing-part-1/>
- 3) “直接的模倣音”とは筆者の造語であり、『音楽表現の新たな素材としての模倣音の探求～非言語音による直接的模倣音のための発音器官の使い方～ 2009、音楽表現学 Vol.7』の中で初めて用いた。
- 4) Dery, Marc “Rap!,” Keyboard(November 1988), p.34
- 5) 2001年12月にニューヨークを拠点とする A-Plus 社によって設立された世界最大のヒューマンビートボックス・コミュニティ。現在、月間10万人以上のビートボックスが、記事を投稿したり質問をしたりする交流の様子を閲覧している。特に、サイトの運営メンバーの一人である Tyte, Gavin によるビートボックス・チュートリアルや概念形成のための投稿記事は人気が高い。URL <https://www.humanbeatbox.com>
- 6) この定義は、筆者がおこなった『音楽表現の新たな素材としてのヒューマンビートボックスに関する基礎研究』2014～2017 日本学術振興会科学研究費基盤研究(C) 26370193の研究成果を基に、2017年5月10日から用いている定義である。
- 7) Matela, Patryk. 2014. Human Beatbox -Personal Instrument-. Poland: Merkurysz Polski, p.12.
- 8) 河本洋一『音楽表現の新たな素材としての模倣音の探求～非言語音による直接的模倣音のための発音器官の使い方～』

音楽表現学 Vol.7 2009、pp.22-25 では、グラフを使って本物の音と直接的模倣音を比較した。 / NHK 教育テレビ『スイエンサー』 2018年11月13日放送 番組の中でバスドラムとハイハットシンバルの本物の音と、ビートボクサーが模倣した音を比較した音響分析グラフを示した。

- 9) 吸気による奏法は、“インワード (in word)” と呼ばれており、日本人ビートボクサーの“すらぶるため”が得意としている。
- 10) 河本洋一『音楽表現の新たな素材としてのヒューマンビートボックスに関する基礎研究』 2014～2017 日本学術振興会科学研究費基盤研究 (C) 26370193
- 11) ほとんどのビートボクサーは、ステージネームで活動している。本稿では、初出の場合にステージネームと本名を併記し、それ以降はステージネームのみで表記する。
- 12) 河本洋一『ヒューマンビートボックスの可能性についての一考察～ビートボクサーへの聞き取り調査とワークショップを通して』 札幌国際大学紀要第43号、2012、p.158.
- 13) 世界最大の大会は、2005年から3年に1度ベルリンで開催されている Beatbox Battle World Championship (BEATBOX BATTLE TV 主催) である。
- 14) ヒューマンビートボックスに関する動画は、個人でアップロードされているものを含めると無数に存在するが、多種多様な表現を整理し、歴史的背景やチュートリアルまで掲出されている意味で、HUMANBEATBOX.COM が最も良く整理された動画サイトであると考えられる。(2019年9月末日現在)
- 15) Tyte, Gavin. 2005. “A New School of Beatboxers” The New Skool: HUMANBEATBOX.COM Article of Beatboxing Part 3: <https://www.humanbeatbox.com/articles/history-of-beatboxing-part-3/>
- 16) 河本洋一『ヒューマンビートボックスの可能性についての一考察～ビートボクサーへの聞き取り調査とワークショップを通して』 札幌国際大学紀要第43号 2012、 p.163
- 17) ヒューマンビートボックスの初心者への基本的なビートの発音方法の指導には、母国語の言語表記を用いる方法がある。(筆者海外調査2015年3月3日～5日:台湾) 例えば、8ビートを刻むドラムセットの音の模倣を指導する場合、日本語では、ボ・ツ・カ・ツ、英語では b・t・k・t、中国語では、不・吃・可・吃等の表記を使用するが多い。
- 18) Tyte, Gavin. 2005. “A New School of Beatboxers” The New Skool: HUMANBEATBOX.COM Article of Beatboxing Part 3: <https://www.humanbeatbox.com/articles/history-of-beatboxing-part-3/> の記述では、インターネットのコミュニティの重要性が指摘されており、今日のヒューマンビートボックスの世界的な潮流を作ることに寄与したとされている。なお、本記事を掲載している HUMANBEATBOX.COM 自体も、世界最大級のコミュニティの一つである。
- 19) 河本洋一『ビートボクサーへのご質問』 2017年5月12日～9月11日 Google フォームを使ったインターネット調査 37.4% がコミュニティの形成に関する情報について得たいと回答している。(n=318)
- 20) 河本洋一『ヒューマンビートボックスの可能性についての一考察～ビートボクサーへの聞き取り調査とワークショップを通して』 2012、札幌国際大学紀要第43号、 p.157
- 21) アフリカ・バンバータ (Afrika Banbaataa:1957-) が1974年に呼称した文化の名称。1970年代のアメリカ合衆国ニューヨークのブロンクス区で、アフロ・アメリカンやカリビアン・アメリカン、ヒスパニック系の貧困層のコミュニティで行われていたブロック・パーティから生まれた文化と言われている。
- 22) ヒップホップの要素については、その時代区分によって三大要素、四大要素、九大要素などの諸説があるが、本稿では、ヒップホップの文化が起こった1970年頃の要素として、次の文献で採用されている三大要素を用いる。: Rose, Tricia・新田啓子訳『ブラック・ノイズ』 みすず書房 2009、 p.71
- 23) Park, Jon& Tyte, Gavin& White, Noise. 2005. “Let’s take it old school and trace back the very beginnings of beatbox in New York City.” History of Beatbox: Old School: HUMANBEATBOX.COM Article of Beatboxing Part 2: <https://www.humanbeatbox.com/articles/history-of-beatboxing-part-2/>
- 24) 河本洋一『ビートボクサーへのご質問』 2017年5月12日～9月11日 Google フォームを使ったインターネット調査回答者318の中で65.7%が技術的な情報について得たいと回答している。
- 25) 日本では2009年に一般社団法人日本ヒューマンビートボックス協会(和田辰也理事長)が設立された。目的は「ヒューマンビートボックスの普及振興を通じ、社会一般の理解と信頼を高めるとともに会員相互の交流、連絡、親睦その他会員に共通する利益の向上並びにアーティストの技能向上、社会的地位の向上を図る為の活動を行う」ことにある。この団体の設立により、各種大会やイベントが活発に行われるようになり、徐々に国内での愛好者によるコミュニティが形成されているが、芸術形式としての概念形成に関する議論が公の場で行われることはまだ少なく、インターネットなどの私的な場での議論に留まっているのが現状である。また、学術的研究のテーマとしてヒューマンビートボックスが取り上げられたのは、『音楽表現の新たな素材としてのヒューマンビートボックスに関する基礎研究』 日本学術振興会科学研究費基盤研究 (C) 26370193 (2014年採択) である。
- 26) Kew, Charlie. 2015. “Toward a Beatboxology” Music Undergraduate Dissertation for Goldsmiths University (London) : ヒューマンビートボックスを新たな芸術形式として捉えるための論考が多種多様な参考文献や資料を基に書かれている。
- 27) Cinii (国立情報学研究所学術情報ナビゲータ)によれば、2009年よりも前に書かれたヒューマンビートボックスに関する論文は、日本国内では存在しない。(2019年5月8日最終検索)
- 28) Matela, Patryk. 2014. Human Beatbox -Personal Instrument-

- Poland: Mercuriusz Polski
- 29) Garfield, Joey の監督による、74 分のドキュメンタリー映画。ヒューマンビートボックスの成り立ちや、ビートボックスたちの生の声が記録されている。この作品には、Darren Robinson (Buff)、Doug E. Fresh、Rahzel、D.O.A、Biz Markie、Emanon、Scratch などの世界的ビートボックスヤーが出演している。なお、映像著作権の問題から、現在ではこのドキュメンタリー映画の映画館での上映やインターネット上での配信は禁止されている。しかし、史料価値が極めて高いため、Afra を通じて交渉した結果、監督の高配により本稿の作成目的での閲覧が認められた。
- 30) 2018 年 11 月 13 日 19:25 に NHK 教育テレビ (E テレ) で放映された。
- 31) 河本洋一『学校教育におけるヒューマンビートボックスの指導でのオノマトペの活用法の研究』 2019 年度採択 2021 年度終了予定 日本学術振興会科学研究費基盤 (C)19K02799
- 32) Matela, Patryk. 2014. Human Beatbox -Personal Instrument-. Poland: Mercuriusz Polski, p.12.
- 33) Park, Jon& Tyte, Gavin, & White, Noise. 2005. “When did the term beatbox come from” History of Beatbox: Old School : HUMANBEATBOX.COM Article of Beatboxing Part 2: <https://www.humanbeatbox.com/articles/history-of-beatboxing-part-2/>
- 34) コミュニティーサイト The history of electronic musical instruments from 1800 から転載した。 <https://120years.net>
- 35) 1959 年から 1964 年の間に Wurlitzer 社 (アメリカ) によって製造された世界初の本格的なリズム自動生成機。ボタンを操作することによって、回転する円盤から電氣的に音を発生させる仕組みは当時としては画期的であり、1969 年に音楽家からの反対により製造が中止された。(Wikipedia 最終検索日 2019 年 5 月 8 日)
- 36) Park, Jon& Tyte, Gavin, & White, Noise. 2005. “When did the term beatbox come from” History of Beatbox: Old School : HUMANBEATBOX.COM Article of Beatboxing Part 2: <https://www.humanbeatbox.com/articles/history-of-beatboxing-part-2/>
- 37) Dalzell, Mark. (在米のドラマー) の投稿サイト flickr から転載した。 <https://www.flickr.com/photos/metropolismusic/3752674999> 装置の文字盤に、“beatbox” という文字が刻まれている。
- 38) 綴りは、地名としては Africa が正しいが、この場合の綴りは Afrika で正しい。
- 39) Rose, Tricia (2009) : 新田啓子訳 『ブラック・ノイズ』 東京 : みすず書房 2009、 p.19 [Rose, Tricia.(1994) BLACK NOISE :Rap Music and Black Culture in Contemporary America (Middletown: Wesleyan UP)]
- 40) 同上書 p.19
- 41) 谷口眞生子 『ヒップホップについての諸要素 -ブロンクスからイタリアへと-』 2010、大阪音楽大学紀要第 49 号、 p.54
- 42) Matela, Patryk. 2014. Human Beatbox -Personal Instrument-. Poland: Mercuriusz Polski, p.15.
- 43) Matela, Patryk. 2014. Human Beatbox -Personal Instrument-. Poland: Mercuriusz Polski, p.16.
- 44) ヒューマンビートボックスのニュース・クールは、“new skool” あるいは、“nu skool” と表記される場合もある。
- 45) Tyte, Gavin. 2005. “A New School of Beatboxers” The New Skool: HUMANBEATBOX.COM Article of Beatboxing Part 3: <https://www.humanbeatbox.com/articles/history-of-beatboxing-part-3/>
- 46) HUMANBEATBOX.COM の論考『A New School of Beatboxers』を基に、筆者が再構成した。
- 47) 本稿では、国内で販売実績のあるレコードや CD の発売年については、国立国会図書館の検索サービス NDL ONLINE で確認した。
- 48) Matela, Patryk. 2014. Human Beatbox -Personal Instrument-. Poland: Mercuriusz Polski. p.18
- 49) Matela, Patryk. 2014. Human Beatbox -Personal Instrument-. Poland: Mercuriusz Polski. pp.16-17
- 50) “Doug E. Fresh from USA interview” BEATBOX BATTLE TV, 2010. <https://youtu.be/QHBSEH1JkQI>
- 51) クリック・ロール (click rolls) とは、Doug E. Fresh が開発し普及させたとされるクリック音を複数回連続で発生させるヒューマンビートボックスの演奏技術の一つ。呼気で音を発生させるアウト・ワード・クリックロール (out word click rolls) 方法と、吸気で発生させるイン・ワード・クリックロール (in word click rolls) 方法がある。ただし、舌の側面から口に息を入れるだけなので、肺に空気を入れておらず、ハミングをしながら発音することができる。
- 52) “Fat Boys Rap Group Interview with Bill Boggs” Bill Boggs TV, 2012. <https://youtu.be/Hwb9-3UQ5nE>
- 53) Matela, Patryk. 2014. Human Beatbox -Personal Instrument-. Poland: Mercuriusz Polski. pp.17-18
- 54) 筆者が実施した、ビートボックスヤー Afra への聞き取り調査 2018 年 2 月 26 日
- 55) Matela, Patryk. 2014. Human Beatbox -Personal Instrument-. Poland: Mercuriusz Polski. p.18
- 56) 青木和富 『ボビー・マクファーリン 哲学に似た音楽の想像力』 2015、日本経済新聞電子版夕刊コラム 2015 年 4 月 2 日号
- 57) Park, Jon& Tyte, Gavin,& White, Noise. 2005. “When did the term beatbox come from” History of Beatbox: Old School : HUMANBEATBOX.COM Article of Beatboxing Part 2: <https://www.humanbeatbox.com/articles/history-of-beatboxing-part-2/>
- 58) Ibid.
- 59) Matela, Patryk. 2014. Human Beatbox -Personal Instrument-. Poland: Mercuriusz Polski. p.73
- 60) Kenny Muhammad 公式ホームページ <http://www.kennymuhammad.com/> 最終検索日 2019 年 5 月 8 日

- 61) Tyte, Gavin. 2005. "A New School of Beatboxers" The New Skool: HUMANBEATBOX.COM Article of Beatboxing Part 3: <https://www.humanbeatbox.com/articles/history-of-beatboxing-part-3/>
- 62) 筆者が実施した、ビートボクサー Afra への聞き取り調査
2018年2月26日
- 63) Tyte, Gavin. 2005. "A New School of Beatboxers" The New Skool: HUMANBEATBOX.COM Article of Beatboxing Part 3: <https://www.humanbeatbox.com/articles/history-of-beatboxing-part-3/>
- 64) Pray, Doug の監督による、92分のヒップホップの音楽のドキュメンタリー映画。日本では2002年に劇場公開されており、DJの立場から1970年代以降の一大ムーブメントを捉えるという作品である。
- 65) 1989年に設立された米国シティパークス財団 (City Parks Foundation) という非営利団体が主催するステージイベントである。
- 66) 筆者が実施した、ビートボクサー Afra への聞き取り調査
2018年2月26日
- 67) 「韻シストが認めてもらうまでの戦いとは？20年の軌跡を全員で語る」2017年7月14日 CINTRANET 特集記事 <https://www.cintra.net/interview/201707-insist>
- 68) 用語として正しいのは、「ボーカル・パーカッション」であるが、番組内で使用されていた「ボイス・パーカッション」という表記を用いる。
- 【音源 (レコード・CD) 資料】 ※初版年**
Doug E. Fresh. 1984. Just Having Fun. Enjoy Records. USA. EN-6035
Doug E. Fresh. 1984. The Original Human Beat Box. Vintertainment. USA. VTIS-004
Doug E. Fresh & MC. 1985. Ricky D. The Show/La Di Da Di. Cooltempo. UK COOLX-116
Fat Boys. 1984. FAT BOYS. Suntra Records. USA. USU-1015
Emanon. 1986. EMANON. Pow Wow Records. USA. PW-7403
Emanon. 1986. Fresh Beats. Pow Wow Records. USA. PRO-419
Emanon. 1987. Susie. Pow Wow Records. USA. PRO-422
Emanon. 1990. I Came Back To Party. Nu Groove Records. USA. NG-037
Biz Markie. 1988. Goin' Off. Warner Bros. Records. USA. 9 25675-2
Biz Markie. 1989. Just A Friend. Warner Bros. Records. USA. 9 22784-7
Bobby McFerrin. 1988. Don't worry, Be Happy. EMI-Manhattan Records. USA. 006-2029117
THE ROOTS. 1993. Organix. Remedy Recordings. USA. RRLP001
Rahzel. 1999. Make the Music 2000. MCA Records. USA. MCAC 11938
Rahzel. 2004. Rahzel's Greatest Knock Outs. Sure Shot Recordings. USA. SSR 9010
Scratch. 2002. The Embodiment of Instrumentation. Ropedope Records. USA. 93096
Lifers Group. 1993. Living Proof. Intercord Record Service. USA. IRS 975.574
THE ROOTS. 1999. Do you want more?????. DGC. USA. PRO-A2-4693
Afra. 2003. Always Fresh Rhythm Attack!!. ODDJOB Records. Tokyo, Japan. ZBCB-2004
- 【映像資料】**
Garfield, Joey. 2002. Breath Control: The History of the Human Beatbox. Tribeca Film Festival. USA. Ghost Robot.
Wilson, Hugh. 1984. Police Academy. Warner Bros. Entertainment Inc. USA.
Pray, Doug. 2001. SCRATCH. Fireworks Film. USA.

【資料】 ヒューマンビートボックスの素材となる標準的な音の分類法 (HUMANBEATBOX.COM による分類)
既存の楽器の種類を基に 17 カテゴリー 124 種類で分類している。

KICKS (11)	HI HATS & SYMBALS (10)	SNARES (15)	SCRATCHES (8)
CLASSIC KICK DRUM	EGG SHAKER	BEAT RHINO SNARE	QUACK SCRATCH/DUCK SCRATCH
INWARD CLASSIC KICK	REVERSE OPEN HI-HAT	COUGH SNARE	D-LOW SCRATCH
REVERSE DRY KICK	BRUSHED CYMBAL	SPIT SNARE	REWIND OR REVERSE SCRATCH
REVERSE CLASSIC KICK	SPLASH CYMBAL	INWARD K SNARE	WHISTLE SCRATCH
ELECTROKICK/DOUG E FRESH KICK	CRASH CYMBAL	OUTWARD K SNARE/CLASSIC RIMSHOT	THROAT SCRATCH
THROAT KICK/ELECTRO,808 TECHNO KICK	INWARD FAST HI-HAT/INWARD TK'S	INWARD ROTO SNARE	LIGHT ELECTRO SCRATCH/WHISTLE SCRATCH
DRY KICK/OUTWARD D KICK	FAST HI-HATS/TK'S	PERCUSSIVE K SNARE/K RIMSHOT	VOCAL SCRATCH
UVULAR KICK ROLL	OPEN HI-HAT	PH SNARE/INWARD CLASSIC SNARE	CLICKS CLOPS AND POPS (10)
KICK ROLL	BASIC HI-HAT	CL SNARE/INWARD CLASSIC HANDCLAP	CLOP AND HOLLOW CLOP
KICK AND HAT ROLL	KICK AND HAT ROLL	INWARD HOLLOW SNARE	TENNIS POP
TONGUE KICK ROLL	VOCALIZED BASSES (8)	COMBINATION(DOUBLE) SNARE	OUTWARD CLICK ROLL
WHISTLES (6)	EVIL BASS	CLASSIC PSH SNARE	OUTWARD POP
LASER	INWARD BASS	NGSH SNARE/909 SNARE	LOUD CLOP
DRAG WHISTLE/MEXICAN WHISTLE/THROAT WHISTLE	OD BASS	T SNARE/808 SNARE	BONGO
TOOTH WHISTLE	VIBRATION BASS	FAST SNARE ROLL	SUPER CLICK
RECORDER WHISTLE/FLUCTUATING WHISTLE	THROAT BASS	LIP ROLLS (6)	BOUBLE CLICK
COMMON WHISTLE	LIP OSCILLATION/LIP BASS	TEETH LIP ROLL	CLICK
WHISTLE SCRATCH	SNORE BASS	HOLLOW LIP ROLL	INWARD CLICK ROLL
ELECTRONIC EFFECTS (4)	CHEST BASS	SUBWOOFER LIP ROLL	INSTRUMENTS(5)
ROBOT MOTOR	SQUEALS AND ZIPPERS (6)	VOCALIZED LIP ROLL	MODULATED TRUMPET /MODULATED SYNTHESIZER
SEGA SOUND	TOOTH CHIRP	BASIC LIP ROLL	MUTED GUITAR
INWARD ROBOT VOICE	TUTU/KIM OR HUTCH SQUEAK	OUTWARD CLICK ROLL	TRUMPET
SIREN	QUACK SCRATCH/DUCK SCRATCH	BREATH EFFECTS(2)	PIZZICATO STRINGS
VOICE ALTERATIONS(1)	INWARD ZIPPER	INWARD BASS	BONGO
POLYPHONIC OVERTONE SINGING	BIRD OR SQUIRREL CHIRP	INWARD DRAG	VOCAL SYNTHESIZERS (2)
ROLLS (10)	SEGA SOUND	OSCILLATIONS (10)	MODULATED TRUMPET /MODULATED SYNTHESIZER
OD BASS	MISCELLANEOUS EFFECTS (10)	TOOTHLIP OSCILLATION	SIREN
ALEM ROLLING BEAT	LASER	INWARD CLICK ROLL	【注】 本表は HUMANBEATBOX.COM の「Searchbeatbox Sounds」を基に筆者が表を作成した。これは発音体の種別による表ではない。表には SNARES のように既存の楽器や装置・自然音などの直接的模倣音の名称をそのまま種別表記に利用した場合と、LIP ROLL のような調音法の特徴を種別表記に利用したものの両方が混在している。 なお、SIREN や MODURALATED の TRUMPET のように、複数の種別に重複して記載した場合もある。
HELICOPTER CLICK ROLL	CRICKET	INWARD TONGUE ROLL	
INWARD CLICK ROLL	REVERSE REVERB	UVULAR OSCILLATION	
INWARD TONGUE ROLL	SAW	INWARD LIP OSCILLATION	
TONGUE BASS	BIRD OR SQUIRREL CHIRP	LIP OSCILLATION/LIP BASS	
UVULAR KICK ROLL	SEGA SOUND	TONGUE BASS	
KICK ROLL	SIREN	LIP WOB WOB BASS	
KICK AND HAT ROLL	CLOWN HORN	UVULAR KICK ROLL	
FAST SNARE ROLL	WATER DROP	TONGUE KICK ROLL	
	BALLOON SQUEAK		